



第5章

まとめ

5

第5章 まとめ

本章では、大学における学びの実態（第2章）、英語運用能力の修得状況（第3章）、学びや大学生活に対する意識（第4章）について、本調査の分析結果を概括する。

5.1 大学における学びの実態

第2章では、大学における学びの実態を4つの側面から分析した。第一に、大学教育のなかで取り入れられている学習方法を調べるために、大学の授業をつうじた学生たちの学習経験の頻度に注目した。第二に、学生たちの授業内外での学習行動や学習態度を手がかりに、学びに対する姿勢を検討した。第三に、学生たちが生活のなかで学業に置いている比重を調べるために、授業への出席、授業外学習、各種課外活動などに費やす時間を分析した。この分析結果をとおして大学1年生の1週間の過ごし方を知ることができることから、学生たちの生活実態を垣間見ることもできた。第四に、大学入学後の約半年のあいだに、授業内外の大学生活のなかで学生たちが獲得した諸種の能力や知識に焦点をあてて、大学教育の成果や効果の測定を試みた。以下、第2章の各節の分析結果を対応づけて、要約する。

まず、出席重視の授業を多くの学生たちが受講している。このことは、生活時間の大部分を授業出席のために費やしている学生が多い点とも符合する。その一方で、授業中に居眠りをしたり授業を退屈に感じたりする学生は全体の80%を占め、授業中に集中力を持続させることがむずかしい様子も見受けられる。さらに、半数程度の学生が欠席や遅刻をしていることもわかった。

授業で採用されている学習方法についてみていくと、大部分の授業で定期的に小テストが実施され、レポートの提出が課されている。学生自身が文献や資料を調べる機会も多く、学生たちは課されたレポートに取り組んだり、授業準備や復習をおこなったりしている様子がうかがえた。授業課題に取り組むためにWeb上の情報や図書館の資料を利用することも多く、インターネットを使って授業課題を受けたり提出したりする頻度も高い。なかには、期限までに授業課題を提出できなかった学生もいるが、多くの学生が期限までに課題を仕上げている。実際に、約70%の学生が入学後にコンピュータの操作

能力を高めていることから、大学での学習においてインターネットが情報収集の手段としても、情報交換の手段としても非常に重要なツールになっていることがわかる。同時に、授業時間外に他の学生と一緒に勉強したり、授業内容について話したりする者も多く、学生たちは学生同士のネットワークも活用しながら勉強に励んでいることがよみとれる。だが、単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加する学生は、ごくわずかである。総じてみれば授業外学習に費やす時間は、授業に出席している時間に比べると極端に短い学生が多かった。

授業の形式に関しては、学生が発表したり議論したりする演習形式や、実験、実習、フィールドワークなどの学生参加型の授業スタイルも採用されているが、全体的にみてそう多くはない。授業の進め方に学生の意見が取り入れられたり、授業で検討するテーマを学生が設定したりする機会は少なく、多くの授業が教員主導の講義形式で実施されていることがうかがえる。

授業で取りあげられている具体的な内容を本調査から直接知ることはできないので、学生たちが伸ばした能力を手がかりとして、学士課程教育全体のなかで1年生の授業(カリキュラム)がどのような位置づけにあるのかを調べた。多くの学生たちが専門分野や学科の知識、一般的な教養を着実に伸ばしているものの、分析力や問題解決能力、批判的に考える能力、文章表現の能力、プレゼンテーション能力を大学入学後の半年間に伸ばした学生は半数前後であった。これらの能力は、専門分野や学科の知識、一般的な教養といった基礎知識を土台として、継続的なトレーニングを重ねることで身につく応用力、実践力と考えられるため、2年生以降に伸びる可能性は十分にある。おそらく1年生の段階では、その「伸びしろ」を広げることに重きを置いた内容の授業が実施されているのだろう。一方で、外国語の運用能力や数理的な能力に関しては全般的に伸びが鈍く、低下を感じている学生の割合が他の能力やスキルに比べて目立っていた。

教員からの学生に対するはたらきかけとしては、授業内容と社会や日常生活のかかわりについて説明したり、提出物に添削やコメントをつけて返却したりすることがあると、約半数の学生が回答している。また、TA(大学院生の授業補助者)やSA(上級生の授業補助者)を活用している授業も半数程度であった。

それに対して、学生は授業中に教員の考え方や意見に異議を唱えることも、教員に親近感をもつことも少ない。教員の研究プロジェクトに参加している学生もほとんどいない。約80%の学生がオフィスアワーなど授業時間外に教員と面談する時間をあまりもっておらず、大半の学生にとって教員は近寄りやすい存在になっていることがうかがえる。

入学して半年しか経っていないせいか、ほとんどの学生が大学の教職員に卒業後の進

路や職業選択について相談をした経験をもたないが、半数弱が仕事に役立つ知識やスキルを学んだと感じており、学生の30%が入学時に比べて卒業後に就職するための準備が進んだと回答していた。

学業以外の活動についてみていくと、マンガ・雑誌を除いた読書にあてる時間は短い傾向にあるのに対して、テレビやゲーム、映画鑑賞などの個人的な趣味のために学生たちは時間を費やしていた。また、70%以上の学生が部活動や同好会活動に参加し、アルバイトをしている。それらの活動に費やす時間は相対的に長く、授業出席に次いで、学生生活のなかで大きな比重を占めていた。このように、学生たちは学業以外にも、さまざまな活動をおこないながら、学生生活を送っている。それゆえ、限られた時間を効果的に利用することになるが、時間管理能力を伸ばした者は半数弱であり、逆に約10%の学生がその能力の低下を感じている。

以上のような授業内外での経験をつうじて、半数前後の学生が人間関係を構築する能力や他の人と協力して物事を遂行する能力、コミュニケーション能力を伸ばしている。しかし、授業をつうじたボランティア活動の機会などはほとんどなく、大学やアルバイトよりも外側にある社会との接触機会はきわめて少ないことがうかがえる。そのためか、異文化の人々と協力する能力や、地域社会が直面する問題を理解する能力、グローバルな問題の理解、国民が直面する問題を理解する能力についてはあまり高まっておらず、異文化の人々に関する知識を増やした学生も、1年生の段階では半数以下にとどまっていた。

5.2 英語運用能力の修得状況

第3章では、大学における学習の実態のうち、英語運用能力の修得状況に特化して検討した。具体的には、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力の5つの英語運用能力について、CEFR尺度を用いて学生本人の自己申告による熟達度レベルを調べた。

初級レベルに相当するAの割合は、入学時も調査時も、読む力が最も少なく、表現力、書く力、聞く力、会話力の順に多くなる（図5.1）。別の言い方をすれば、中上級レベルが最も多い運用能力は読む力で、表現力、書く力、聞く力、会話力の順に少なくなるということである。総じて、劇的な変化はみられないものの、入学時から調査時までの半年間に、学生全体の英語運用能力の熟達度レベルは高まっているといえるだろう。

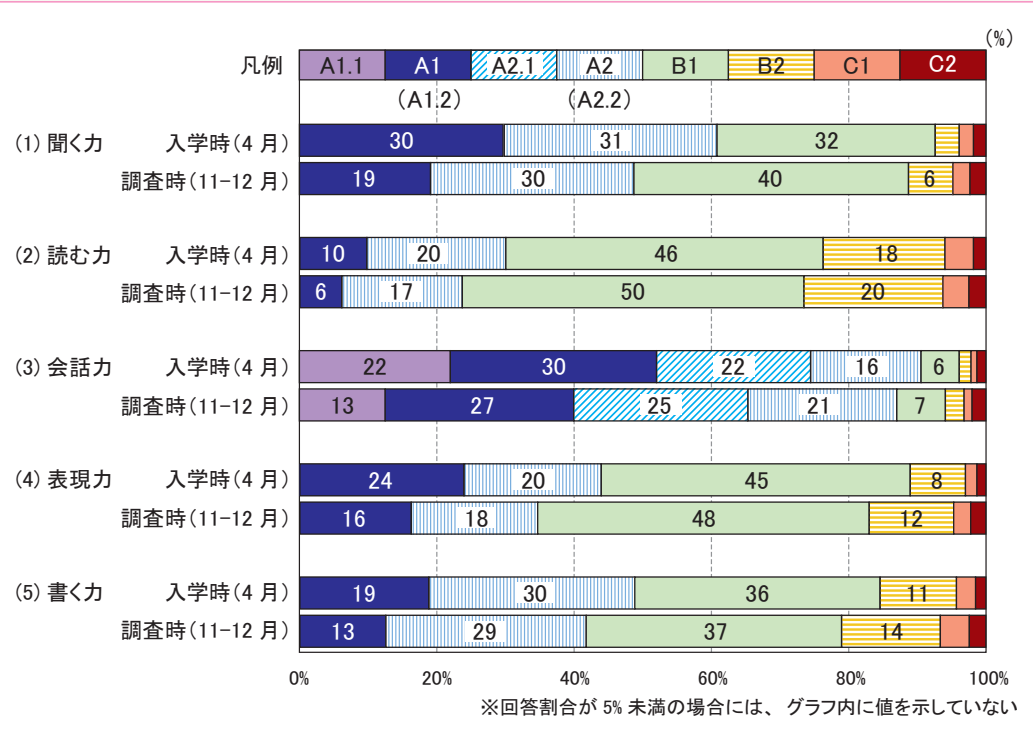


図5.1 入学時と調査時の英語運用能力の熟達度レベル

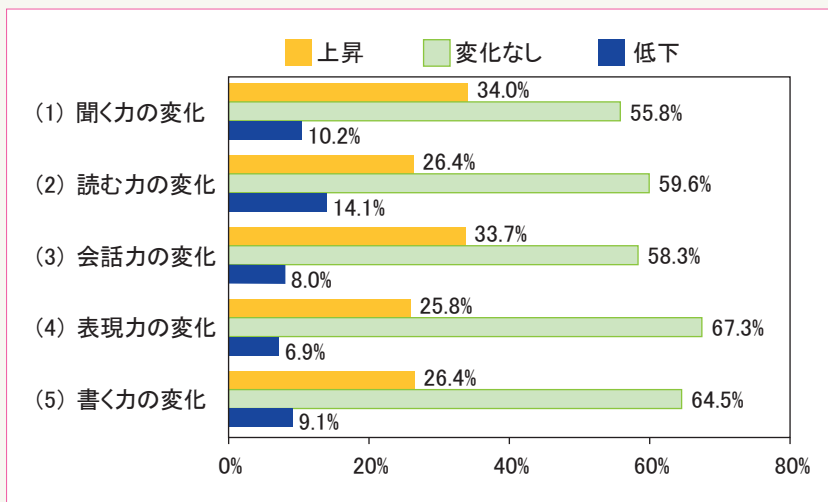


図5.2 入学後から調査時までの英語運用能力の変化

ところが、個々の学生の熟達度レベルの変化を確認すると、能力が高まった学生は全

体の約30%にとどまっている。過半数は入学時のレベルから変化がなく、10%前後の学生が能力低下を感じていた（図5.2）。このように、大学における英語学習をつうじて英語運用能力を高めている学生も一定数みられるが、現状維持の学生が最も多い。英語運用能力の低下を引き起こした学生も少なからずいることから、大学における英語学習の成果は一様ではないといえる。

以上のような英語運用能力の修得とともに、本調査では、英語に対する好感度（好き・嫌い）、英語に対する苦手意識（得手・不得手）、英語圏への渡航経験の有無、各種英語検定試験の受験の有無に関する設問を用意した。これらの設問から、授業外での英語学習に対する行動や意識を調べることができる。

英語に対する好感度とCEFRによる熟達度レベルの関連については、第3章で詳述したので、ここでは英語の好き嫌いの分布だけ確認しておこう（図5.3）。英語のことが好きな学生は、どちらかといえば好きという回答も合わせれば、ほぼ半数を占める。嫌い、どちらかといえば嫌いと回答した学生の割合は4分の1にあたる約25%である。残りの約4分の1の学生は好きでも嫌いでもないと回答している。総じてみれば、英語に対して嫌悪感をもつ学生のほうが少なく、英語が好きな学生のほうが多い。

「好きこそその物の上手なれ」というように英語が好きだから英語力が上達するのか、あるいは上達したから好きになるのかその因果関係まではわからないが、本調査の結果によれば半数の学生が英語のことを好きだと回答にしているにもかかわらず、半数近くの学生が英語に対して苦手意識をもっている（図5.4）。英語がとても得意、あるいはどちらかといえば得意な学生は合わせて約25%、得意でも苦手でもない学生は約30%となっており、英語に対して苦手意識を抱いている学生は40%をこえていた。

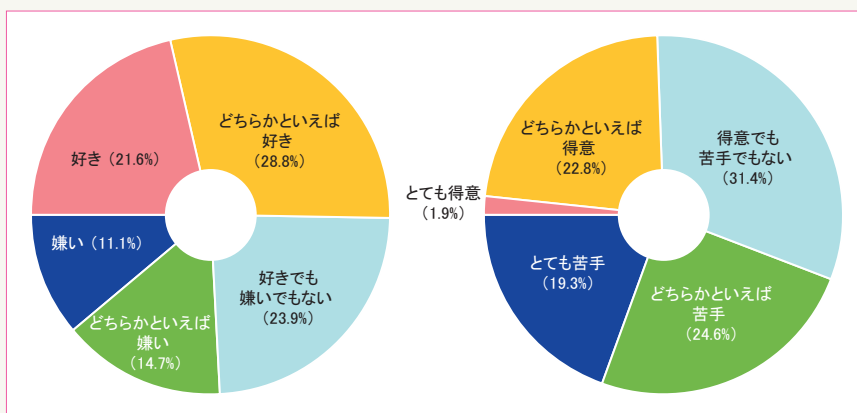


図5.3 英語に対する好感度

図5.4 英語に対する苦手意識

なぜ、英語が好きな学生が多いのに、苦手と感じている学生が多いのだろうか。あくまでも推測の域は出ないが、現地で実践的に英語を使った経験が少ないことがその理由の1つにあるのかもしれない。実際に、今までにアメリカやカナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏に渡航した経験について確認すると（図5.5）、渡航経験のない学生が過半数を占めている。このことから、日本国内で学習対象として英語に触れてきた学生が多いことがよみとれる。英語圏に渡航したことがある学生は約40%で、その大部分が旅行で渡航している。大学1年生までに、英語圏にホームステイや留学したことがある学生もいるが、そのほとんどは1ヶ月未満と比較的短期間の渡航である。なかには英語圏に住んでいた経験をもつ者もいるが、その割合はきわめて低い。英語圏への海外渡航未経験者が多いことは、5つの英語運用能力のなかで会話力の熟達度レベルが目立って低かったこととも関連しているのかもしれない。

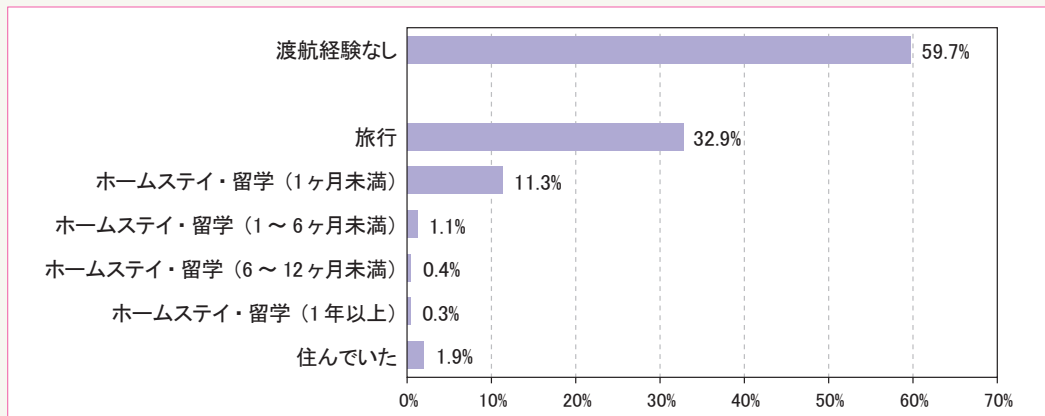


図5.5 英語圏への渡航経験（複数回答）

だが、海外渡航未経験者が多いにもかかわらず、英語運用能力のなかで読む力は入学当初から、B2レベル（中上級レベル）に達していた学生が20%以上もいた。それは、大学入試やさまざまな英語検定試験の受験勉強のために、英文の読解力のトレーニングを受けてきた学生が多いからではないだろうか。今までに学生たちが受験したことがある英語検定試験をみると（図5.6）、受験経験のない学生は約30%にとどまり、残りの約70%は何らかの英語検定試験を受験した経験をもつ。そのなかで圧倒的に多いのは英語実用検定試験（いわゆる英検）である。次位はTOEICだが、英検と比べると受験経験者の割合は非常に低い。その他さまざまな英語検定試験についても受験したことがある学生はいるが、相対的にみて少ない傾向にあった。

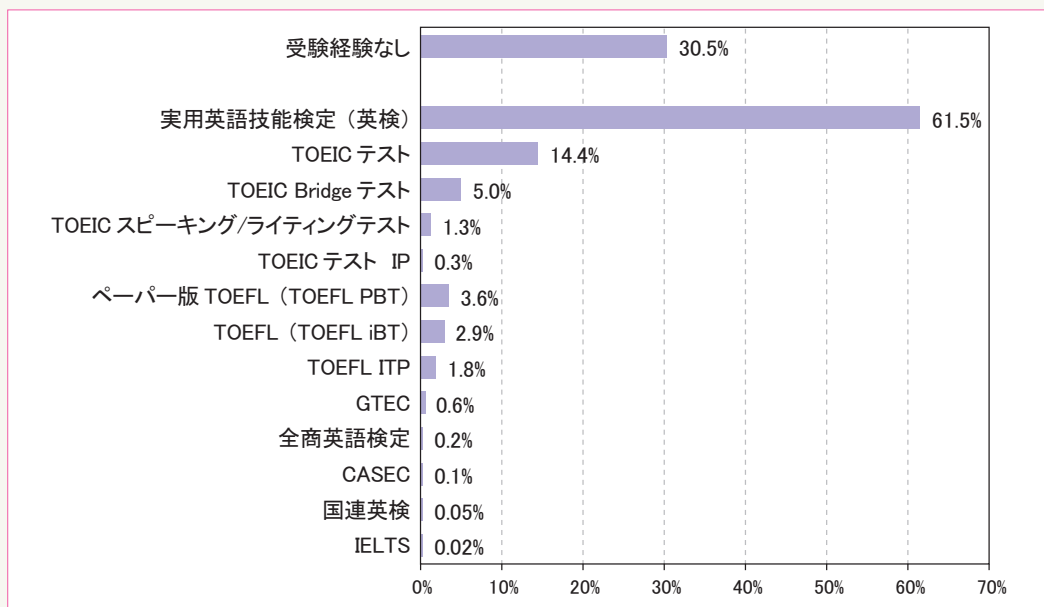


図5.6 各種の英語検定試験の受験経験 (複数回答)

5.3 学びや大学生活に対する意識

第4章では、学生たちが大学教育や自身の大学生活をどのようにとらえているのかを調べるために、大学での学びや生活全般、教育環境に対する学生たちの評価を検討した。具体的には、大学生活への適応感、学生生活の充実感、大学の教育内容および教育環境に対する満足感、大学卒業後の予定進路に関する意識を分析した。その結果、次のようなことがわかった。

入学から半年のあいだに、大学の学生向けサービスを利用することや、時間を効果的に使ったり効果的に学習する技能を修得したりすることに成功した学生は半数程度にとどまっており、大学が求める水準に応じて学習できていない学生もいる。また、大学教員の学問的な期待を理解することや、大学教員と顔見知りになることについては過半数の学生がうまくいっていないと感じている。このように、対象が教員にかかわる内容であると成功している学生は少なくなり、うまく適応できておらず、とまどいを抱えている学生のほうが多いことがうかがえた。だが、80%以上の学生が友人関係を築くことに成功しており、学生生活を充実させている学生も同程度いる。充実した学生生活を送るうえで、友人関係の構築は重要な鍵になっているのかもしれない。

在学している大学から提供される教育内容や大学の雰囲気に対する学生たちの満足感

については、全般的にそれほど高くはなかった。満足感が最も高かったのは他の学生と話をする機会だが、その割合は半数程度にとどまる。大学での経験全般に満足している学生は半数を割り込み、学生同士の一体感や多様な考え方を認め合う雰囲気などに対する満足感もそれほど高くない。すでに述べたように、大多数の学生が友人関係の構築に成功しており、自分にとってごく身近な友人を多くの学生がもっている。だが、大学全体の雰囲気となると、入学して半年が経過しても、十分に馴染めていない学生も多くいることが垣間見られた。具体的な教育内容に対する学生たちの評価は厳しく、満足している学生は30%程度にとどまり、不満を感じている学生も目につく。

一方、大学教育を支える設備や施設、各種支援制度については、その対象によって学生の満足感は大きく異なっていた。多くの学生がよく利用する、図書館やコンピュータなどの設備や支援については満足感が高い傾向にあった。一方、実験室の設備や器具、奨学金など学費援助の制度に関しては、学生全員が利用するものではないせいか、総じてみれば満足感は高くない。利用の機会が開かれていようとも、1年生全員が日常的に使用するとは限らないスポーツジムやトレーニングルームといったレクリエーション施設、健康保健サービス、キャリアカウンセリングについても満足感は低かった。

最後に大学卒業後に予定している進路をとおして、学生たちが大学教育を受けることに対してどのような意味づけをしているのかを確認した。過半数の学生が大学卒業後に就職する予定であり、学士課程教育を学校教育の最終段階として考えている学生が多いことがわかった。それに対して、大学院への進学予定者は多くはなく、留学や他大学への編入学、専門学校への入学を予定している者はごくわずかだった。このように、学士課程教育を更なる学校教育の土台としてみなしている学生は相対的に少ない。もちろん、卒業後の進路を決めかねている学生もいるが、その割合は10%程度と多くはない。したがって約90%の学生は、自覚的かどうかはわからないが、自身の人生プランのなかで大学教育(学士課程教育)を次のステップにつながるものにとらえていることがよみとれた。

以上、本調査の結果を概観したが、設問間の関連や実際の学生の教務データとの関連に関する分析を進め、学生本位の教育改善につなげていく必要があるだろう。